

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 7 日現在

機関番号：82619

研究種目：基盤研究(B) (海外学術調査)

研究期間：2014～2016

課題番号：26300041

研究課題名(和文) 北方寒冷地域における織布技術と布の機能

研究課題名(英文) Weaving Techniques and Functions of the Textile in Northern Areas

研究代表者

佐々木 史郎 (SASAKI, SHIRO)

独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館・ 部長

研究者番号：70178648

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では日本とロシアの博物館に収蔵されているシベリア、極東ロシアの先住諸民族と日本の先住民族アイヌの織機と布製品を調査し、北方寒冷地域における織布技術の分布と布の機能を明らかにしようとした。その成果として、以下の2つの結論を得ることができた。第1には、北方寒冷地域における独自の織布技術と布の分布が、当初の予想に比べてはるかに北に広がり、種類も豊富だったことである。第2には、アイヌの事例が他の北方諸民族と比べると特異で、近代化の波に洗われたにもかかわらず、独自の織布技術と布を現代まで継承してきた点である。それはそれらが民族アイデンティティと結びついていたからではないかと考えられる。

研究成果の概要(英文)：In this research project, we investigated weaving tools and textile products of the Ainu and other northern indigenous peoples seen in museum collections in Japan and Russia to clarify the distribution and functions of weaving techniques and textiles. As a result, we reached the following conclusions. First, the original weaving techniques distributed in wider areas and showed more variations in the northern areas than we had expected before. Secondly, while the Siberian indigenous peoples like Khanty, Tatar and Buryat lost their original weaving techniques and tools during the modernization process in the twentieth century, the Ainu were able to maintain their original techniques and tools even in the present days. We assume that this difference was caused by the fact that the Ainu people recognized the weaving techniques and textiles as one of the essential cultural traits and a basis of their ethnic identity.

研究分野：文化人類学

キーワード：織布技術 布 衣文化 鞣皮繊維 北方民族 アイヌ ロシア 北海道

1. 研究開始当初の背景

歴史的におもに動植物を素材とした糸を組み合わせることで作られてきた布の多くは、毛皮やなめし皮などの皮革製品と比べると防寒性の点で劣る。そのために厳冬期にはマイナス数十度にまで下がるシベリアや極東ロシアの大陸部をはじめ、サハリン(樺太)、北海道、千島列島といった日本列島の北方地域でも衣類の主流は皮革製品だと考えられやすい。しかし、これらの寒冷地においても布が衣類として活用される例は少なくなく、比較的南の地域に限られるが、自ら糸を作り、布を織る人々がいた。例えば、西シベリアのマンシ、ハンティ、タタール、南シベリアのショル、ブリヤート、そして、サハリン、北海道、千島列島のアイヌである。それらの織布は皮革製品とともに、おもに衣服をはじめとする身装品や敷物として使われてきた。しかし、近代化の中で、綿織物、毛織物、化繊などの外来の布が普及するとともに、独自の布作りは衰退し、現在はアイヌを除いてほぼ廃絶状態となっている。このようなことが関係して、北方寒冷地の諸民族の独自の織布技術と布は、アイヌの事例以外には研究対象として顧みられることがほとんどなかった(ポポフの1955年の論文は例外的な事例である(Попов 1955))。

本研究では、従来十分な研究がなされてこなかったシベリアの先住諸民族の独自の布に着目し、その製作技術と実生活での機能を明らかにすることを第1の目的とした。さらに、従来研究し尽くされたかのように見えたアイヌの織布技術や布の文化にも、まだまだ見過ごされていた点が数多く残されていたことから、それを第2の研究対象とした。さらに、20世紀末から今世紀にかけて、北海道から極東ロシアを含む北東アジアで考古学的な発掘調査が進んできたことから、繊維断片の発掘事例が各地で報告されるようになり、独自の織布技術の分布がもっと北に広がっていたこともわかってきた。そのような繊維遺物を第3の研究対象とした。

2. 研究の目的

「1. 研究開始当初の背景」でも触れたように、研究対象としたのは、日本列島の北方地域とシベリアという寒冷地域の先住諸民族の織布技術と布である。先住民族の事例に絞ったのは、彼らの文化がその地域の自然環境と歴史に深く根ざしているからである。本研究の目的は大きく次の2つに分けることができる。1) 北方地域における独自の織布技術の分布を明らかにする。2) 衣服あるいは服飾文化における独自の布と外来の布の使い分け、あるいは機能の違いを明らかにする。1) では、伝世資料を使った新しい時代の分布状況だけでなく、考古遺物を使った先史時代における分布状況を明らかにすることにも挑戦した。2) では、アイヌの事例に着目して、特定地域の特定のスタイルの衣服と装

身具における布素材の変遷に着目した。

3. 研究の方法

1) 調査対象

主に博物館に所蔵されている資料の熟覧を中心に調査を進めた。それは今回の研究が、現在の技術と製品や作品ではなく、過去に注目して、時間軸に沿った変遷を追ったからである。「1. 研究開始当初の背景」でも触れたように、かつて独自の織布技術と布を持っていた北方民族のほとんどはすでにそれらを失っている。唯一残している北海道アイヌの場合でも、近現代という時代の中でそれらが消滅の危機に瀕したことがあり、そうした過程においては、技術の劣化や変化が起きている可能性がある。独自の技術が十全に機能していた時代の用具と製品を求めるためには博物館の資料を調査する以外にない。

本研究では以下の要領で博物館に収蔵されている独自の織布技術と布に関する資料を調査した。まず、調査対象を a) 織機、b) その織機によって織られた布、c) その布で縫製された衣類、そして d) 外来の素材を使いながらも、独自の衣類と同様の縫製技術、様式、装飾で作られた衣類とした。またアイヌの場合には、e) さまざまな織りの技術と装飾の技法が集積されている儀礼用の刀懸け帯(エムッアッ)も調査対象に加えた。さらに独自の織りの技術を残してきたアイヌを包含する北東アジア地域における織り技術の導入時期とその変遷を調べるために、f) 北海道、千島列島、サハリン、ロシア沿海地方などの地域の発掘遺物(その多くが炭化した繊維断片)も調査対象に加えた。

2) 調査分析方法

調査は、資料現物の a) 熟覧、b) 全体写真撮影、c) 部分写真撮影、d) 接写カメラやデジタルマイクロスコープを使用した拡大撮影、e) 博物館の記録による資料の基礎情報の収集、f) 博物館の学芸員あるいは資料保存担当者への聞き取りによる資料の背景情報の収集、という手順で行った。資料の基礎情報(収集関連情報、製作者・製作地関連情報、法量、収蔵状況など)は博物館に残る記録類から、記録に残されていない付随情報は博物館員からの聞き取りで得られるため、資料の熟覧、撮影によって詳しく見たのは、a) 織機の場合にはその構造と織りの仕組み、b) 布あるいはその断片の場合には繊維素材と織り、染め、刺繍などの技法、c) 衣類の場合には仕立てと縫製技術や縫製系の素材、織りや染めの技法、刺繍技法と刺繍系の素材、d) アイヌの刀懸け帯の場合には繊維素材、染めの技法、刺繍技法と刺繍系の素材などであった。

分析は、織機の場合には、部品がばらばらにされて収蔵されていることが多いために、それを資料にダメージを与えない範囲で組み立て、そこから、大きさ、形、使い方に關する情報を得た。

布や衣類の場合には、まず全体撮影をした後、接写あるいはデジタルマイクログラフで細部の拡大撮影を行った。その写真を、あらかじめ素材を決めて撮影したサンプルの写真と比較するという形で布や糸の素材同定をしたが、慣れるにしたがって、拡大鏡や顕微鏡を使用した観察で主要な素材（樹皮、草皮、絹、木綿、獣毛、レーヨンなど）の同定はできるようになった。続いて織りの技法については、低い倍率の拡大鏡や接写撮影によって織物を観察し、平織、綾織、縹子織、紋織、もじり織などの織物組織を同定した。縫製については、全体観察と全体撮影から仕立て（筒袖かもじり袖かたもと袖かなど、衿・衽・裾の有無など）と布の縫い合わせ方（かがり縫いか平縫いか）に着目した。装飾については、顕微鏡による観察や接写撮影、マイクログラフによる撮影で得られたデータから、糸や布素材の同定、刺繍技法や装飾布の縫い付け技法の同定を行った。

アイヌの刀懸け帯については、布や衣類とほぼ同じ点に着目しながら観察し、記録した。

3) 調査した博物館

調査した博物館は国内、海外合わせて 46 に及ぶ。海外ではロシアの博物館を調査した。それはロシアが広大な北方寒冷地域を国内に抱えているからである。その中でもロシアの文化人類学と博物館学の主導的な地位を占める 2 つの博物館、すなわち、サンクトペテルブルク市にあるロシア科学アカデミーピョートル大帝記念人類学民族学博物館とロシア民族学博物館を 2014 年と 15 年に調査した。これらの博物館はシベリア、極東ロシアの先住諸民族の資料とともに、北海道、サハリン、千島のアイヌの資料を多数収蔵しており、本研究の最も重要な調査地だった。ことに人類学民族学博物館には伝世資料の中では世界最古級のアイヌの木綿衣と刀懸け帯(1775 年収蔵(Белков 2015))があり(後述)、それらはアイヌの衣文化を考察する上で、製作年代と製作地の面で基準点となりうる資料である。研究の最初期と中盤にそれらの重要資料をじっくりと観察した。

ロシアではその他に、プリヤート共和国でプリヤート独自の織布の調査を行い、極東地域の博物館でアイヌ資料と考古学資料の調査を行った。すなわち、ウラン・ウデ市のザバイカル地方諸民族博物館、ウラジオストク市のアルセニエフ記念沿海地方郷土博物館とロシア科学アカデミー極東支部極東諸民族歴史学考古学民族学研究所博物館、ペトロパヴロフスク・カムチャツキー市のカムチャツカ州立総合博物館である。

日本国内では、本州側では青森市教育委員会資料保管庫、東京国立博物館、早稲田大学會津八一記念館、日本民藝館、国立民族学博物館、天理大学附属天理参考館などを調査し、北海道では北海道博物館、函館市北方民族資料館、アイヌ民族博物館、苫小牧市美術博物

館、旭川市博物館、釧路市立博物館をはじめ 40 館におよぶ博物館で調査を行った。

これらの博物館で行った調査のデータは「アイヌ・北方民族テクスタイルデータベース」というデータベースにまとめた。ここでは 44 の博物館（最終年度の最後の 2 館のデータは含まれていない）で調べた 539 件の資料の基礎的なデータと調査の結果得られた所見を盛り込んだ。現在調査先の博物館との交渉が継続中であり、まだ全データを完全に公開できる状況にはないが、許可を得次第、できるところから公開していく予定である。

4. 研究成果

3 年間の調査研究によって、北方寒冷地域の織布文化について、織機の種類とその地理的な分布、外来素材の活用と衣文化の変遷について多くの知見を得ることができた。それを「2. 研究の目的」であげた 2 つの目的に沿って紹介する。

1) 北方寒冷地の織布技術の分布

まず第 1 の目的である「北方寒冷地域における独自の織布技術の分布を明らかにする」ことに関しては、ユーラシアの北方寒冷地域、すなわちシベリアとロシア極東地域、および隣接する北海道には、少なくとも 16 型式の織機とそれに伴う織布技術があったことを把握しており、以下に列記する 8 型式の織機とそれらで織られた布を調査した。

a) 腰機 1：手動式の輪状綜絢を備えた腰機。この織機型式は環太平洋とその周縁地域に分布している。北方寒冷地域での使用民族としてはアイヌのみを確認しており、北海道アイヌとサハリンアイヌの腰機 1 とそれらで織られた布を調査した。

b) 腰機 2：ヨコモじり織の細幅織物専用の綜絢のない腰機。この織機型式は、北海道アイヌのもとで 1970 年代後半頃から使われており、北海道二風谷での腰機 2 による機織り作業とそれらで織られた布（背負い紐）を調査した。

c) 杭機 1：固定式の輪状綜絢を備えた杭機。この織機型式は、北アフリカ、西アジア、中央アジアとその周縁地域、およびユーラシア北方地域にかけて広く分布している。ロシアではタタール、ハンティ、ショル、チェルカン、プリヤートのもとで使われてきたことがあきらかになっており、タタール、ショル、チェルカンの杭機 1 とそれらで織られた布、およびプリヤートの布を調査した。

d) 杭機 2：足踏み式のつがい目綜絢を備えた杭機。この織機型式は中央アジア、東南アジア大陸部、さらにヨーロッパロシアから西シベリアに分布している。ロシアでの使用民族では、ハンティとマンシを確認しており、ハンティの杭機 2 とそれらで織られた布を調査した。

e) 杭機 3：手動式の開孔板綜絢を備えた杭機。この織機型式はシベリアのチュヴァシとタ

タールが使用していたことが知られており、チュヴァシの杭機3とそれで織られた布(ゴザ)を調査した。

f) 杵機: 手動式の箱型開孔板綜絢を備えた杵機。この織機型式は日本とタイとラオスで確認しているが、北方寒冷地域における資料としては北海道の擦文文化期の考古遺物として箱型開孔板綜絢があるのみである。この箱型開孔板綜絢とそれを備えた杵機で織られたと考えられる考古遺物のゴザ状の布の断片を調査した。

g) 錘機: 桁とコモ槌を備えたタテもじり織物専用の綜絢のない錘機。この織機型式は東アジアをはじめとしてユーラシア大陸の広範な地域、さらにアフリカにも分布している。北方寒冷地域での使用民族としては、アイヌ、ハンティ、ナーナイなどが知られている。そのうちアイヌの錘機と錘機で織られた布(ゴザ)を調査し、ナーナイではそれで織られた布(ゴザ)を確認した。

h) 手機: タテ糸を手で引っ張りながらヨコ糸を組み合わせるヨコモじり織物専用の綜絢のない織機。この織機型式は日本、アラスカ、ニュージーランド、エチオピアに分布しており、北方寒冷地域での使用民族はアイヌとアラスカのトリンギットであるが、アイヌの手機とそれで織られた布(刀懸け帯)を調査した。

一方、上記のような織機と織布技術に係る調査のほかに、今回は考古遺物についても極東ロシアと北海道で少なからず調査をおこなった。それらのうちでタテもじり織物については、7500年前といわれるロシア沿海地方のチョルトヴァ・ヴァロータ遺跡のタテもじり織物の断片(ロシア科学アカデミー極東支部歴史学考古学民族学研究所博物館)、北海道の擦文文化期の豊里遺跡のタテもじり織物の断片(旭川市博物館)、千島列島最北のシムシム島のオホーツク文化期(12,13世紀)の遺跡から出土したタテもじり織物の断片(函館市北方民族資料館)、カムチャツカ半島西海岸北部のプスターヤ I 遺跡出土の500年前のタテもじり織物の断片(カムチャツカ州立総合博物館)を調査した。その結果、それらの考古遺物のうち、とくに新石器(または縄文)時代の出土資料については、g)の錘機を使って織られたかどうかは不明だが、いずれもその後の比較的新しい時代の考古遺物や近・現代のアイヌのゴザをはじめとするタテもじり織物と類似していることを確認した。

2) アイヌにおける外来布の機能

第2の目的である「衣服あるいは服飾文化における独自の布と外来の布の使い分け、あるいは機能の違いを明らかにする」ことに関しては、主にアイヌの衣類について調査した。アイヌの衣類には、アイヌ自らが糸を作り、それらの糸を使って織った布をおもな素材としたものとしてオヒョウやシナノキの樹

皮繊維で作られたアットゥシと呼ばれる衣服とイラクサの草皮繊維で作られるテタラペと呼ばれる衣服がある。ただし、北海道ではアットゥシが優勢で、サハリンではテタラペが優勢という傾向が見られる。これはサハリンではオヒョウが少ないという植生の違いが関連している。

さらに、北海道、サハリンともに経糸に外来の糸を併用して縞の布を織り、それらをおもな素材とした衣服もある。そうした衣服では、オヒョウの糸と藍木綿の糸の併用、イラクサの糸と藍木綿の糸の併用が多いが、中にはオヒョウの糸とイラクサの糸を併用したものや、イラクサの糸に白木綿の糸と藍木綿の糸を併用したものもある。縞模様の衣服はそれだけで見栄えが良かったために、外来の糸が手に入りやすくなるとその数量は増えていったと考えられる。

今回の研究では、アイヌの糸作りにも注目した。イラクサの糸では草皮繊維を績むことによって(2本の繊維の端をより合わせながら繋ぐこと、繋ぎ目はほとんどわからない)長い糸にしているのに対して、オヒョウ、シナノキなどの樹皮繊維では2本の繊維の端を結び合わせるによって長い糸にしているものが多い。これは繊維の特性によるものなのか、糸作り技術の変化によるものなのか、慎重に見極める必要がある。刀懸け帯に使用されるための樹皮繊維の糸は績んで作られていることから、衣類用の細い糸でも績んで作られていた可能性が考えられるが、江戸時代以降に製作された伝世資料や近・現代のアットゥシのうちに、績んだ糸で織られたことが確実なものは現時点では確認できていない。

現代でこそ手作業で作られるアットゥシは高価だが、基本的には日常着あるいは労働着だった。それに対して儀礼や宴席など晴れの場合で着る晴れ着は、木綿や絹などの外来の高価な布をふんだんに使用した衣装だった。各地の博物館にはアットゥシやテタラペと並んで、そのような衣装も多数収蔵されている。

外来布の代表格は絹布である。北海道やサハリン、千島列島といった地域に絹布が流入する経路は主に本州とアムール川流域だった。すなわち日本と中国と両方から絹布が流入した。日本から流入したものは小袖に仕立てられたものが多かった。小袖はそのままでも晴れ着としてアットゥシの上から羽織られたが、着古されると細断されて衣服の材料や装飾用の端切れとして使われる場合が少なからず見られた。中国製のものには「蝦夷錦」の名で知られてきたもので、元来朝貢の恩賞として下賜された龍文の官服またはその素材となる反物であったが、それらも次第に端切れとなって装飾に使われてきた。絹布は日本でも中国でも高価な布地であり、当然アイヌにとっても高価ではあったが、財力のある人はそれを誇示するように小袖や蝦夷錦、あるいはその端切れで装飾された晴れ着を着

用した。サンクトペテルブルクの人類学民族学博物館と釧路の釧路市立博物館で確認された。虻田を中心とした内浦湾に面した地域で製作されたと考えられる木綿衣(木綿の地布に細く切った布を置いて縫い留める装飾をしたもので、この地域では「ルウンペ」と呼ばれる)では、装飾に使われた布素材のすべてが絹だった。前述のように、サンクトペテルブルクの資料には1775年収蔵という記録が見つかっている(Белков 2015)。劣化の状況から、製作から収蔵されるまでに100年は経過していたと考えられることから、製作年代は17世紀後半と推定される。釧路の資料はそれと瓜二つであり、恐らく同時代に同じ地域で製作された可能性が高い。

木綿は近代以降庶民の布地となったが、江戸時代までは高価だった。したがって、サンクトペテルブルクや釧路に残された資料のように、藍木綿の地布に絹の装飾布をふんだんに貼り付け、絹糸の刺繍で飾った衣装はきわめて高価な「晴れ着」だった可能性が高い。1776年にロシアで刊行されたJ・G・ゲオルギが編集した『ロシア帝国諸民族誌』(Georgi 1776)に「クリル人」と称して、千島アイヌのことが紹介されているが、その挿絵の人物はアットゥシの上にこれらの資料によく似た木綿衣を羽織っている。ルウンペのような木綿衣は日本の着物文化の羽織の影響によって誕生した衣服で、普段着の上から羽織る晴れ着として着用するようになったと考えられ、羽織とほぼ同様の襦を両脇につけ、着幅を広くする工夫をしたと考えられる。

この研究では当初虻田地方のルウンペに類似する衣装(特に襦を伴う衣装)を追跡した。その結果それに類する衣装は日本各地の博物館に残されていたが、大きな傾向として時代が下るにつれて装飾に使われる絹布が減り、絹布の色合いに似せた木綿布に置き換わるという状況が見えてきた。江戸時代後期の木綿生産の増大とともに、その流通が増え、木綿布が絹布に取って代わったともいえるが、幕末から明治期にかけても木綿はアイヌの人々にとって貴重な素材で、それを手に入れるのに苦労したともいわれる。

明治末期以降になると木綿と並んで人造繊維の布が普及してくる。すなわちレーヨン(人造絹糸)である。絹のように光沢があり、滑らかな風合いを備えたレーヨンは安価であるために、アイヌの衣服でも地布、装飾布あるいは補修布として多用されるようになっていった。

3) 結論(織布技術の分布と盛衰)

第1の結論は、北方寒冷地域における独自の織布技術と布の分布が、当初の予想に比べてはるかに北に広がり、かつ種類も豊富だったことである。上述のように、北方寒冷地域に少なくとも16型式の織機が認められ、その内8型式の織機を調査できた。さらにタテムもじり織の技術は新石器時代(あるいは縄文

時代)というきわめて古い時代から見られ、その分布は千島列島からカムチャツカ半島北部にまで及んでいた。

第2の結論としては、アイヌの事例が北方諸民族の中では特異だったということである。すなわちハンティ、マンシ、タタール、プリアートなどは独自の織布技術と織機、布を持ちながら、その伝統を現代まで継承できず、道具と製品が博物館に残されるのみとなっていた。近代化の波の中で綿織物や毛織物、化繊の織物など外来布が急速に普及したためである。それに対してアイヌは同じように近代化にさらされながら、技術的な劣化は見られたものの、平織のアットゥシやテタラベ、タテムもじり織のゴザやヨコモじり織の刀懸け帯を製作するための技術と道具を今日まで継承してきた。

その理由を探るには、今後アイヌの織布技術史と服飾文化史を他の北方諸民族の事例と比較しながら分析しなくてはならない。最後にここでその見通しを述べておく。

アイヌの場合には、近代化以前(江戸時代から明治初期まで)にアットゥシやテタラベが和人(本州以南の人々)にも使われていて、それらを売ることで作り手たちが収入を得るという状況が見られた。それは明治初期まで続き、その後途絶えるのだが、そのような歴史的な背景があったからこそ、近代化によって独自の文化を失っていく中でも、織布技術と衣文化に民族アイデンティティの拠り所を求める風潮が強まり、それが技術継承を後押ししたのではないのか。これはあくまでも仮説であり、今回の調査によって得られたデータを分析することでこれから検証していきたい。

文献

Georgi, J. G. 1776 *Beschreibung aller Nationen des Russischen Reichs, ihrer Lebensart, Religion, Gebräuche, Wohnungen, Kleidungen und übrigen Merkwürdigkeiten*. Sankt Petersburg: C. W. Müller.

Белков, П. Л. 2015 *Очерки истории ранних океанических коллекций МАЭ*. Санкт Петербург: Музей антропологии и этнографии им. Петра Великого (Кунсткамера) РАН.

Попов, А. П. 1955 Плетение и ткачество у народов Сибири в XIX и первой четверти XX столетия. *Сборник музея антропологии и этнографии*, XVI, стр. 41-146.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 3件)

佐々木史郎・吉本忍・日高真吾・齋藤玲子・和高智美・津田命子・右代啓視・戸田恭司「釧路市立博物館所蔵アイヌ木綿衣について」『釧路市立博物館紀要』37:17-28、2017年(査読なし)

佐々木史郎「アイヌ服飾文化の新展開」『季刊民族学』160: 44-51、2017年(査読なし)
吉本忍「アイヌの衣服から見えてきたこと」『月刊みんぱく』461: 11-12、2015年(査読なし)

〔学会発表〕(計 13件)

吉本忍「アンギンと日本のタテもじり織物」冬期企画展『すてきな布-アンギン研究100年-』関連講演会、2017年3月5日、新潟県立歴史博物館

齋藤玲子「アイヌの衣文化」第453回ウィークエンド・サロン、2017年2月5日、国立民族学博物館

日高真吾「国立民族学博物館の露出展示を支える展示手法の現状と課題」みんなでまもる文化財みんなをまもるミュージアム事業第2回研修会、2017年2月1日、熊本市現代美術館

日高真吾「国立民族学博物館におけるアイヌの文化展示場の失火対応について」2017年1月31日、国立歴史民俗博物館

佐々木史郎「プリヤートの織機と織物」日本シベリア学会第2回研究大会、2016年11月19日 千葉大学

吉本忍「アイヌの衣服から見えてきたこと」苫小牧市美術博物館ミュージアムトーク、2016年10月1日、苫小牧市美術博物館

佐々木史郎「北方寒冷地域における織布技術と布の機能」苫小牧市美術博物館公開研究会、2016年7月17日、苫小牧市美術博物館

吉本忍「アイヌ服飾研究の新展開」苫小牧市美術博物館公開研究会、2016年7月17日、苫小牧市美術博物館

日高真吾・右代啓視・内田順子「夷酋列像を考える」第455回みんぱくゼミナール、2016年4月16日、国立民族学博物館

佐々木史郎「アイヌの衣服の素材と文様」みんぱく公開講演会「ワールドアートの最前線 アイヌの文様とエチオピアの響き」、2016年3月25日、オーバルホール(毎日新聞大阪本社ビル)

佐々木史郎「『夷酋列像』の首長たちがまとう衣装」第454回みんぱくゼミナール、2016年3月19日、国立民族学博物館

吉本忍「北海道の繊維製品と植物利用」第30回日本植生史学会、2015年11月7日、北海道博物館

日高真吾、吉本忍、佐々木史郎、右代啓視、石川朗、和高智美「北斗遺跡出土の織物・繊維遺物に関する一考察」日本文化材科学会第32回大会、2015年7月11日、東京学芸大学

〔その他〕

ホームページ等

国立民族学博物館科学研究費助成事業による研究プロジェクト「北方寒冷地域における織布技術と布の機能」

<http://www.minpaku.ac.jp/research/activity/project/other/kaken/26300041>

データベース「アイヌ・北方民族テキストデータベース」(公開に向けて調整中)

6. 研究組織

(1)研究代表者

佐々木史郎(SASAKI Shiro)
東京国立博物館・部長
研究者番号: 70178648

(2)研究分担者

吉本 忍(YOSHIMOTO Shinobu)
国立民族学博物館・名誉教授
研究者番号: 10124231

日高 真吾(HIDAKA Shingo)
国立民族学博物館・文化資源研究センター・准教授
研究者番号: 40270772

齋藤 玲子(SAITO Reiko)
国立民族学博物館・民族文化研究部・准教授
研究者番号: 20626303

(3)研究協力者

右代啓視(USHIRO Hiroshi)
北海道博物館・学芸主幹

宮地 鼓(MIYAJI Tsuzumi)
苫小牧市美術博物館・主任学芸員

(4)海外研究協力者

セルゲイ・ベレズニツキー
(Sergei Bereznitsky)
ロシア科学アカデミーピョートル大帝記念人類学民族学博物館上級研究員

ナジェージュダ・マイコヴァ
(Nadezhda Maikova)
ロシア科学アカデミーピョートル大帝記念人類学民族学博物館資料管理部長

アンドレイ・ソコロフ(Andrei Sokorov)
ロシア科学アカデミーピョートル大帝記念人類学民族学博物館研究員

ヴィクトリア・ペルヴァーク
(Viktoria Pervak)
ロシア民族学博物館資料管理部長

オリガ・シャグラノヴァ(Ol'ga Shaglanova)
ザバイカル諸民族博物館主任研究員

アンドレイ・プタシェンスキー
(Andrei Putashensky)
カムチャツカ州立総合博物館研究員